

障害に対する理解や知識を持つことが、  
障害がある子どもたちや、その両親、  
そして教師自身の支えとなる。



写真1

な自信になると考えてきました。僕はこれから教師となる学生に障害の基本的な知識や対応を自分自身の臨床的経験を踏まえわかりやすく伝えたいと考えています。そのことで教師になった後、学校の先生(幼稚園も含む)が先に発達障害や精神疾患に気づき、早期から本人に応じた支援を行い、保護者にうまく説明がなされることで、経過がよくなることもあると思うので、現場の先生の「気づき」と「早期からの本人に応じたかわり」のできる専門性、そして、保護者に寄り添える人間性の育成が大切であると考えています。興味がある学生さんは一緒に学んで行きましょう！

学校教育講座  
特別支援教育 障害児医学分野

准教授 <sup>ね ころ</sup> 根来 秀樹



教育学部に来たわけ

2009年3月まで奈良県立医科大学精神医学講座に勤務していました。教育学部に来た理由は数え切れないほどありますが、「児童精神科医として、これから教員になる学生に伝えたいことがいくつもあった」ということが大きな理由です。児童精神科医として出会った子どもと親が同意すれば、必ず担任の先生に病院に来ていただき説明をするというのを、この何年間か繰り返し繰り返し行ってきたのですが、障害に関する知識や理解また支援などに教員間でもあまりにも差がありすぎ、それをどうにかしないと子どもたちにとって大変なことになると危機感を抱いていたことが大きいと思います。病院に来ていただいていたというのではあまりにも効率が悪く、また時間が少なすぎると考えた僕は、それ以降学校や県・市の教育委員会から呼ばれば講演やスパーバイズなどを行ってきたのですが、呼んでいた先生は確かに熱心なもの、こんなに大きな僕の声でも平然と寝ている先生も何人もいて、ここでも教員間の温度差を感じて、愕然とするだけでした。

今現在教員になっている人への啓蒙を積極的に行うことに加え、発達障害や精神疾患の知識を持った教員を育てたい。それが出来れば僕が奈良教育大学に来た意味が少しはあると思っています。

脳科学

研究分野は、これまで一貫して児童思春期精神医学の分野における精神生理学的研究を研究

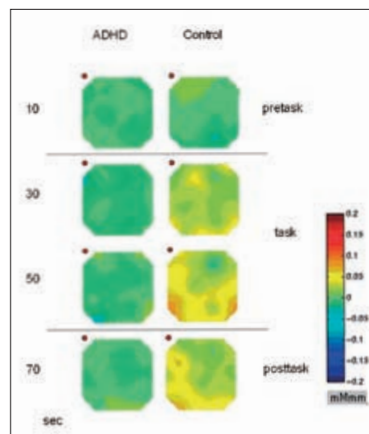


図1

テーマにしてみました。特にADHD(注意欠如・多動性障害)のNIRS(近赤外線スベクトロスコープ)やERP(事象関連電位)を用いた評価や治療の効果における研究は厚生労働省の研究班の一員として行なってきたものを現在も継続的研究中で、「ADHDのガイドライン」にも取り上げられています。NIRSとは近赤外線を用いて簡便に脳の血流の変化を捉えることができる検査方法で現在非常に注目されています。(写真1)NIRSによるADHD児の前頭前野の機能不全を証明した僕たちの研究は日本人で初めて世界的な雑誌に掲載されました。図1は衝動性を抑制するような課題で定型発達児は前頭前野で血流が増加するのに、ADHD児ではその増加がほとんどないことを表しています。今後はある子どもに支援を行い、それらの効果を客観的に脳の働きとして表せたら興味深いと思っています。

学生へのメッセージ

各障害のほんの基本的な知識や対応を知っているだけでも、それから後、その教師が対象となる子どもや両親への支援をしていく上で大き

学生による研究室紹介



「研究とは明らかになっていないことを明らかにすること」  
それが根来先生の研究に対するスタイルです。

奈良教育大学の「ミスタープライン」こと、根来秀樹先生と研究室を紹介します。初めて研究室をのぞくとそこには医学関係の書籍がいっぱいでした。根来先生は、2009年度に奈良県立医科大学より学校教育講座(障害児医学分野)の教員として奈良教育大学に着任されました。先生から本学に来られたきっかけを聞く機会がありました。先生は、児童精神科医としてさまざまな困難に直面する子どもたちと向き合う中で、子どものまわりのおとな(親・教員)が、障害や症状のほんの基礎的な知識や対応を知ることで関わり方に変化が見られ、親(家族)・医師(医療機関)・教員(教育機関)などの相互「連携」が生まれ、子どもたちの症状が改善されていく様子を見てこられました。そのことから先生は、教員やこれから教員を目指す学生に、障害や症状についての基礎的な知識についてこれまでの臨床経験をふまえながら伝え、子どもたちを中心にしたおとなの「連携」をつくることのできる教員を育てることが教育現場に必要と考えられ、奈良教育大学へこられたいと思います。

大学院教育学研究科 修士課程 学校教育専攻  
教育臨床・特別支援教育専修 2回生  
香芝市立志都美小学校教諭 木村 光さん

初年度のゼミ生となる私は、現職教員として大学院に入学し、およそ20年ぶりに母校に再び通うこととなり、根来先生と出会いました。根来先生は研究論文には非常に厳しく、常に理論的な根拠を聞かれます。「研究とは明らかになっていないことを明らかにすること」それが根来先生の研究に対するスタンスで、そのためには現在明らかになっていることを充分に知る必要があると常々おっしゃっています。

自分自身、教員として、いじめに悩む子、不登校の子、障害を持った子、さまざまな子どもたちと関わってきました。その中で子どもたちの支援について先輩教員や相談機関・医療機関などいろいろな立場の方々から意見を聞いたり、アドバイスを受けたりして何とかこれまでやってこられた感がありました。今後は特別支援教育コーディネーターとして、同僚や先輩・保護者からの相談を受ける立場になります。子どもたちを中心にした「連携」のつなぎ役として大学院や根来ゼミで学んだことを役立たせたいと思います。